

レオパルディにおける amore の 無限性と唯一性

——《支配的思考》を中心に

古 田 耕 史

序

近代イタリアを代表する詩人レオパルディ (Giacomo Leopardi, 1798-1837) は、世界のすべてを「不幸 male」と捉えた。彼は苛酷な「生」を生きつつ、「死」に憧れ、生の堪え難い不幸から逃れるために、想像力によって「擬似的な死」を求め、その「快樂」を慰めとした⁽¹⁾。

だがその過程には、「生の意義」という問題をめぐって、根本的な欠如を指摘することができる。つまり、レオパルディの求めた「快樂」は、苛酷な「生」における「慰め」にすぎない。その快樂は積極的なものではなく、現世において得られる快樂としては最善のものでありはしても、「不快の軽減」という消去法的な快樂であり、いかに「永遠性」の空想に浸ることができるとはいえ、所詮は一時的な「生の忘却」にすぎない、消極的なものである。求められた「死」は、「擬似的な死」であり、「激烈な生の反対の状態」というかたちでしか獲得されない。それゆえに、不幸から解放されてはいても («sicura»)、「幸福ではない」 («lieta no») ののである⁽²⁾。

《科学者と哲学者の対話》(1824年)の結びにも、次のような言葉を見出す

ことができる。「生は、生きたものでなければならない。つまり真の生でなくてはならないのだ。さもなくば死の方が、生よりもはるかに価値の優れたものとなろう」⁽³⁾。この対話の中では、生において不可避的な「倦怠 noia」の状態は、死んでも同然の状態とされる⁽⁴⁾。この死んでも同然の状態とは、無感覚で不動の「非-時間」の世界のことではない。すなわち、「擬似的な死」によるエクスタシスの快樂とは似ても似つかぬ、いわば「生きながらの死」、単調な時間の連続の中で生きることの無意味さ、その耐え難い状態のことである。それゆえ、生が真に生きたものでないならば、そしてただ苦痛に満ちたものであるならば、死の方がずっとましだ、というのである。

このようにレオパルディのペシミスティックな世界観によれば、自然の絶対的法則のもとで生きる人間には、「死んでも同然の生」か「死」かのいずれかしか許されていない。だからこそ彼は、「擬似的な死」による快樂を求めるといふ、決定の先送りのような、回避的選択に走るしかなかったに違いない。

だが「擬似的な死」の快樂からは、現実の生の中にあっては所詮つかの間の幸福感を得られるにすぎない。その幸福感も、現実の生からの一時的な逃避によって得られるものであり、不幸な状態の「忘却」にすぎないのである。そのような方途によっては、生における「真の生 *vera vita*」を得ることは叶わない。したがって、生きながら真の幸福を味わうことはできない。生者と死者のどちらに対しても「運命は至福であることを拒んでいる」⁽⁵⁾という《死者たちの合唱》で表現された詩想は、そのことを示しているのである。

では真の幸福、「至福」は、いかにして得られるのだろうか。生と死について語る対話篇では、その答えは示されない。しかし、レオパルディはその答えをひそかに胸に抱きつづけていたと考えられる。それは、「愛 *amore*」である。世界の虚無性を悟ったまだ若き日に、詩人は初めて「愛」というものを知り、愛の齎す無限の快樂と激しい懊悩のあいだで揺れ動く。そして、その燃え立つような生き生きとした思いを、《初恋》*Il primo amore* (1817年) という美し

い詩に表現する⁽⁶⁾。そこでは、愛の思いの「無限性」とその甘美さは、精神的・観念的なものであると同時に、非常に身体的・現世的なものとしても表現されている。そのことは、詩人の実存にとっての愛の意味を読み解くためのひとつの鍵となろう。そして終結部において、思考の中で愛する相手の姿を観想することこそが、詩人を満足させる唯一の喜びとされているのである。

本稿では、「愛」＝「至福」という等式がレオパルディの思索＝詩作活動に一貫していたことを示しつつ、彼にとっての「愛」の実存的意味を考察したい。

1. amore の無限性

「愛 amore」の「無限性」については、「死」の「無限性」と同様に、レオパルディの「無限」の表象のひとつであり“vago-indefinito”のカテゴリーに分類されるものであることはすでに論じたことがあるが⁽⁷⁾、まずはじめに、“vago-indefinito”という、感覚レベルにおける愛の無限性について確認しておこう。

人間のすべての欲望と希望は（……）決して明確・明瞭・正確なものであることはなく、ある不明瞭な観念（感じ・印象）をつねに含んでいる（……）。それはとりわけ愛において見られる。真の恋人の欲望と希望は、他のどんな熱情に突き動かされた人のそれよりも不明瞭で、漠として、不確定的なものである。まさしくこの、真の愛と切り離すことのできない、無限性という理由によって、この〔愛という〕熱情は、それが巻き起こす嵐の直中でも、人間の感じることのできる最高の快樂の源泉なのである。⁽⁸⁾

1821年5月のこの記述では、「愛」の思いと願望が、漠然とした不明瞭なものであるがゆえに至高の快樂を与えてくれるものとされていた。そのことは1817年作の《初恋》においても、すでに示されている⁽⁹⁾。しかし、それは「真

の恋人 *vero amante*」の愛に限定されていた。つまり、“*vago-indefinito*”なのは肉欲でなく、精神的な願望、すなわち、相手の心がこちらに向けられることだけを願う恋人の思いこそが最も“*vago-indefinito*”である、とされていた。ところが、1823年11月の記述では、この「愛の思い」についての議論が一步先へ押し進められる。

今日、プラトンの愛から最も遠く、最も肉感的な愛であっても、その観念とその感情は必然的に、十分すぎるほどに精神的なものを、ゆえに想像的なものを、したがって漠然として非限定的な要素を含んでいる。愛される、享受される、あるいは愛すべき対象のうちには、最も野蛮な人であっても必ず、彼が愛を向けるその対象のある隠れた部分（……）のことを、多少なりとも何らかの仕方考えるものだ。⁽¹⁰⁾

精神的な愛とは程遠い感情や欲望であっても、やはり非限定的で漠とした要素が、要するに“*vago-indefinito*”の要素が、愛の思いには入り込む、というのである。「隠れた部分」とは、目に見える肉体を動かしそれと分ちがちがたく結びついている、目に見えない精神や生命のことである。したがって、その目に見えない「部分」を、人は想像によって見るしかないだろう。あるいは現実には、相手の自分にたいする拒絶や否定的態度として垣間見えることもあるかもしれない。たとえ否定的態度としてあらわれることがなくとも、「隠れた部分」が想像によって思い描いた相手の姿と完全に一致することはありえないだろう。そしてそのことは必然的に、幻滅を齎すことになろう。ともかくも、見えない部分を人は想像力によって見ようとするものであり、想像力による愛のヴィジョンはつねに“*vago-indefinito*”なものとなるのである。

このような愛の思いの不明瞭性は、《アスパジア》*Aspasia*（1834年）第2節（vv. 37-52）にも示されている。

[...]. Vagheggia
 Il piagato mortal quindi la figlia
 Della sua mente, l'amorosa idea,
 Che gran parte d'Olimpo in sé racchiude,
 Tutta al volto ai costumi alla favella
 Pari alla donna che il rapito amante
 Vagheggiare ed amar confuso estima.
 Or questa egli non già, ma quella, ancora
 Nei corporali amplessi, inchina ed ama.
 Alfin l'errore e gli scambiati oggetti
 Conoscendo, s'adira; e spesso incolpa
 La donna a torto. A quella eccelsa imago
 Sorge di rado il femminile ingegno;
 E ciò che inspira ai generosi amanti
 La sua stessa beltà, donna non pensa,
 Né comprender potria.

(……) [愛によって] 傷ついた男は、
 それ以後、自分の精神の娘である
 愛のアイデアを憧れる。
 それは内にオリンポス〔楽園〕の大部分を含みもち、
 愛に夢中になった男が憧れ愛していると
 混乱しながら思いこんでいる当の婦人に、
 容貌も物腰も話しぶりも何から何までそっくり。
 さて彼は、肉体的な抱擁においてさえ、この〔現に存在する〕女性ではなく、
 あの〔観念上の〕女性を敬い愛しているのだ。
 仕舞いには、自分の誤りと取り違えた対象のこと〔=現実の愛の対象と
 想像上の女性とを取り違えていたこと〕を知り、
 腹を立てる。そして、しばしば不当にも
 [現実の] 婦人に罪を着せる。[だが] 女性の性質はまれにしか、
 あの〔完璧なアイデアの、神的な〕イメージの高みにまでとどくことはない。

そして女性は、まさに自分の美しさが
愛を抱く高貴な男たちに呼び覚ますもの〔=愛のアイデア〕のことなど
思いもしないし、
理解することさえできないだろう。

この一節で詩人は、恋する男が現実の女性の中に理想化された女性を勝手に見出してしまうことを冷静に観察している。それは、目に見えない「隠れた部分」を見ようとする時に想像力が働くことを示唆する、先に引いた『省察集』の記述と合致する。現実には幸福な愛の成就を経験したことのない（それどころか幻滅を味わった）レオパルディが、詩の中で想像力を介したイメージの衣装を「愛」に纏わせることをやめなかったのは、想像力が美化の作用を持つゆえに、愛をつねに観念上の美しいものとするのができたからだろう⁽¹¹⁾。実際《アスパジア》においては、愛する女性の美が音楽の美に喩えられ、詩人はその「漠とした」天上的な美の観照によって、エクスタシスの快楽を感じているのである（vv. 33-37）。

さて、「愛の思い」が、レオパルディの「無限」をめぐる省察のなかで“vago-indefinito”なものであることを、われわれは確認した。しかしながら「愛」は、「無限」の観念のもとに単純にカテゴリー化できるという事にとどまらないように思われる。このあと詳しく見る詩《支配的思考》においては、「愛の思い」の至高性が、まるで聖フランチェスコの『被造物の賛歌』*Laudes creaturum*の書き出し「*Altissimu, onnipotente, bon Signore*」を連想させるような、神の如きものとして名指される。それは人間のあらゆる思考のうちで最も「力強く」「揺るぎない」ものとされているのである。

それでは、かくも「力強い」「愛」は、レオパルディの「生」にとって、いかなる意味を持っていたのだろうか。

2. 《支配的思考》における amore

《支配的思考》*Il pensiero dominante* は、1831年から1832年の間にフィレンツェでつくられたと推定される⁽¹²⁾。いわゆる「アスパジアもの連作 ciclo di Aspasia」の、おそらくは第一作である。ところで、便宜上「アスパジアもの連作」として同時期の愛をめぐる詩が一括りに呼ばれるが、これらの詩すべてを歴史上の女性アスパジア⁽¹³⁾と結びつけることは、作品解釈の可能性を限定してしまいかねないだろう。確かにそれがタイトルにもなっている詩をはじめとして、一群の詩が「アスパジア」すなわちフィレンツェの既婚の貴婦人ファンニ（Fanny Targioni Tozzetti, 1805-89）への愛に靈感を吹き込まれたとはいえ、ファンニを別名で呼び「手練の誘惑者」（*Aspasia*, vv. 20-21: «dotta / Allettatrice»）と皮肉る詩人の心のうちには、自分の愛に伝えてくれない相手を貶めるような意図が垣間見える。だが《支配的思考》においては、詩人の愛がこの上なく高貴なものとして表現されており、《アスパジア》で表現されるような愛に絶望した詩人の姿、あるいは歴史上の人物と結びつくようなイメージは、一切看取されないからである⁽¹⁴⁾。そのため《支配的思考》は、薄明の支配する『カンティ』に特有の陰惨なイメージや哀憐の濃色に暗く翳ってはおらず、レオパルディの「愛」をめぐる詩のうちでも最も光輝にみちた恍惚のイメージに彩られた詩となっている。歌い出しは次の通り（vv. 1-6）。

Dolcissimo, possente
 Dominator di mia profonda mente;
 Terribile, ma caro
 Dono del ciel; consorte
 Ai lùgubri miei giorni,
 Pensier che innanzi a me sì spesso torni.
 このうえなく甘美で、力づよく、

わたしの精神の奥深くを支配する思いよ。
 怖ろしい、だが大切な
 天の賜り物よ。わたしの陰惨な
 日々とつねにともにあり
 わたしの前に、かくもしげく戻りくる思いよ。

「支配的思考」とは、「愛の思い」のことである。だが作品中で、“amore”という語は一度も使われていない。これは、迂言法ないし黙説法によって、指示対象を強く印象づける効果をねらったものであろう。その含むところはすなわち、これまで誰もが経験し語ってきたことであるにもかかわらず、レオパルディの経験する「愛」がまったく「新しい」(v. 12: «novo»)ものだということであり、“amore”という月並みな言葉でその経験を名指すことの不可能性である⁽¹⁵⁾。

ここでは《支配的思考》の中にあらわれる語彙・文体上の“無限の標示”⁽¹⁶⁾としての、回帰・反復・継続のモチーフを拾い出し検討を加えたい。愛の「永遠性」への、ひいては「無限性」への志向について、とくに重要と思われる部分を中心に考えることにしよう。

詩全体を通して見ると、“pensier (-o/-i)”という語が7回あらわれ、そのうち一つ目(v. 6)を除き、他は所有形容詞(v. 17: «pensieri miei»; v. 117: «mio pensier»; v. 147: «tuo pensiero»)か、付加形容詞(v. 67: «bei pensieri»; vv. 88 e 110: «dolce pensiero»)を伴っている。また、「無限性」を直接的に喚起する語が多用されている(v. 2: «profonda»; vv. 9, 53, 64 e 125: «sempre»; v. 13: «solinga»; v. 19: «solitario»; v. 28: «celeste»; v. 50: «estrema»; vv. 87, 116 e 120: «morte»; v. 101: «immensità»; vv. 102 e 115: «spesso»; v. 106: «oblio»; v. 119: «infiniti»; v. 137: «ultimo»; v. 140: «sovrumana»など他にも多数)。また、間接的に「無限性」を喚起する文体上の特徴、すなわち頭韻、同語反復、語頭反復、前辞反復、類音疊語法といった種々の修辭の多用がきわめて顕著である(レオパルディの言

語を分析したジラルディの論考にも詳しいので⁽¹⁷⁾、本稿では以下、特に重要な要素として補足すべきものを示す)。

まず、上に引いた第1節では、「愛の思い」が頻繁に詩人の心に回帰することが示される (v. 6: «*si spesso torni*»)。そして、「*torni*」は前行の「*giorni*」と脚韻を踏み、日々の円環的回帰を示唆している。第5節では、接頭辞“*ri-*”の付いた動詞が2つあらわれるが、これはネンチオーニがレオパルディの心情に深く関わることを指摘した接頭辞である⁽¹⁸⁾。すなわち、詩人が愉悦の園の如き愛の思いへ「戻ってゆく」ことをあらわす35行目の「*ritorno*」と、愛の思いが詩人を「ふたたび力づけてくれる」ことを意味する36行目の「*ristora*」である。これらは愛の思いの反復的回帰という意味において「無限性」と結びつく。第9節 (vv. 69-79) では、反語的問いが3回連続し、名詞「*affetto*」もやはり3回あらわれる。「永遠の」を意味する79行目「*eterne*」は、「人間の心 *umancore*」に「全能の主 *prepotente signore*」である「愛の思い」を与える自然の「掟 (法則) *leggi*」を形容しており、そのことによって、「自然」と「愛の思い」の「永遠性」が強く喚起されている。

第13節 (vv. 117-135) には、「永遠性」につながるモチーフが特に顕著にあらわれる。

E tu per certo, o mio pensier, tu solo
 Vitale ai giorni miei,
 Cagion diletta d'infiniti affanni,
 Meco sarai per morte a un tempo spento: 120
 Ch'a vivi segni dentro l'alma io sento
 Che in perpetuo signor dato mi sei.
 Altri gentili inganni
 Soleami il vero aspetto
 Più sempre infievolir. Quanto più torno 125

A riveder colei

Della qual teco ragionando io vivo,

Cresce quel gran diletto,

Cresce quel gran delirio, ond'io respiro.

Angelica beltade!

130

Parmi ogni più bel volto, ovunque io miro,

Quasi una finta imago

Il tuo volto imitar. Tu sola fonte

D'ogni altra leggiadria,

Sola vera beltà parmi che sia.

135

そしておまえは確かに、おお、わが〔愛の〕思いよ、おまえだけがわたしの日々の活力であり、おまえだけが多くの苦悩を齎す快い原因だった。

〔だが〕わたしとともに、〔わたしの〕死によって同時に、

おまえも消えるだろう。

なぜなら、はっきりとした徴によって、

わたしの魂のうちに、おまえが永久の主としてあたえられたことを、

わたしは感ずるのだから。

真の姿〔現実〕は、わたしの他の〔愛以外の〕高貴な幻想を、

ますます弱めていった。〔他方〕わたしは、おまえとともに

〔彼女について〕語ることによって生きているが、

その彼女をふたたび見るのを繰り返せば繰り返すほど、

わたしの息を支えてくれている、あの大きな歓喜と

あの大きな熱狂がますます増大する。

天使のような美！

すべての最も美しい顔さえ、どこで見ようとも、

ほとんど偽の絵の如くに、おまえの顔を

模倣しているように、わたしには思われる。おまえは他の

あらゆる優美さの唯一の源泉であり、

唯一^{まこと}真の美であると、わたしには思われる。

119 行目の «infiniti」、122 行目の «perpetuo」、124 行目の «Solea」、125 行目の «Più sempre» は、無限性を喚起する語（複数形や動詞の半過去形も）であり、125-126 行目の «Quanto più torno / A riveder lei» も、愛する相手の想像中の像を「ふたたび見ようと戻ってゆく」という、愛をめぐる反復・回帰のモチーフのひとつである。他節と同様、語句の反復も際立っている。128-129 行目では、«Cresce quel gran d-» が繰り返される。117 行目の «solo» は、133、135 行目で再度あらわれ («sola»)、いずれも「おまえ = 愛の思い」が「唯一無二の」美と快樂の源泉であることを示している。131 行目と 133 行目で繰り返される «volto» は、愛する相手の想像上の相貌である（同義語の v. 124 : «aspetto» は現実の相手の顔、あるいは世界の現実の様相を示す⁽¹⁹⁾）。121 行目の動詞 «vivi» は、127 行目で主語を変えて反復され («vivo»)、ともに 118 行目の同語源の形容詞 «Vitale» と密接な関係にあり、「愛の思い」の生き生きとした生命力を表現している点で、前節 113 行目の形容詞 «viva» とも繋がっている。

以上のような分析から、この詩の言語面における回帰・反復・継続のモチーフが、内容面での「愛の永遠性」への志向を支えていることが看取できるだろう。「愛の永遠性」とは、愛の幻想がいつまでも持続することを願う詩人の希求の別言である。

3. amore の唯一性

愛の反復・回帰、ひいてはその「永遠性・無限性」を歌う《支配的思考》において、語句の反復・回帰が顕著に見られることを確認した。そして、この詩で名指されることのない「愛の思い」が確かに、他のどんな感情・感覚とも違う、神々しいまでの「愛」の至高性と、他のすべての思考を無化せしめる排他的なまでの力強さを持つものとして様々に形容されていることも、とりわけ第 12 節 (vv. 100-116) を読めば、十分に了解されるだろう。

Che mondo mai, che nova
 Immensità, che paradiso è quello
 Là dove spesso il tuo stupendo incanto
 Parmi innalzar! dov'io,
 Sott'altra luce che l'usata errando, 105
 Il mio terreno stato
 E tutto quanto il ver pongo in oblio! Tali son, credo, i sogni
 Degl'immortali. Ahi finalmente un sogno
 In molta parte onde s'abbella il vero
 Sei tu, dolce pensiero; 110
 Sogno e palese error. Ma di natura,
 Infra i leggiadri errori
 Divina sei; perché sì viva e forte,
 Che incontro al ver tenacemente dura,
 E spesso al ver s'adegua, 115
 Né si dilegua pria, che in grembo a morte.

おまえの驚くべき魅力が立ちのぼると
 思われるその場所は、何という世界であり、
 何という知られざる無限性であり、何という
 楽園なのだろう！ その楽園でわたしは、
 いつものとは別の光を浴びて彷徨いつつ、
 わたしの地上の状態 [= 苦悩に満ちた不毛な生] と、
 あらゆる [苛酷な] 現実を、忘却の淵に捨てるのだ！
 不死の者たち（神々）の夢は、そのようなものであろう、
 そうわたしは思う。ああ、[しかし] 結局は、
 甘美な思いよ、おまえの大部分は
 現実を飾る夢にすぎない。
 おまえは夢であり、明白な幻想だ。だが、優美な幻想のうちにあって、
 おまえは神聖な性質のものだ。なぜならとても生き生きとして力づよいから。
 そのために、[おまえは] [幻想を打ち砕く苛酷な] 現実にたいしては

強固に耐え、

しばしば現実と等しいものになり、
死の懷に抱かれる時になって初めて消滅する。

しかしながら《支配的思考》では、これまで考察してきた愛の「無限性」、すなわち天上の觀照とも言える恍惚の快樂という事のみによっては捉えきれない、愛の兩義的性格が浮き上がって見えている。それはつまり、愛が「無限の快樂」を齎すものであると同時に、激しい懊惱さえ引き起こすものだ、ということである。その兩義的性格は3行目の«Terribile, ma caro»、そして119行目の«Cagion diletta d'infiniti affanni»という撞着語法的な表現に端的に示されている⁽²⁰⁾。

愛のこの負の側面はきわめて現世的・身体的であり、この世界の必然的苦惱・不幸の最たるものでもあろう。それは愛の正の側面である天上的・観念的性格と完全に相反するものである。だが、1817年の《初恋》ですでに示されていた、この「現世的・身体的」という側面が、レオパルディにとっての愛の深微な意味をわれわれに開示してくれるように思われる。

まずはこの詩の内容と関係づけて考えることのできる『省察集』*Zibaldone di pensieri*の文章を引き、レオパルディにとっての愛の作用とその実存的意味についてさらに考えてみたい。

人が愛を感じ取ったとき、世界は彼の目の前から消え去る。愛が向かう対象のほかには何も見えなくなり、群衆や会話の直中にあってもまるで独りでいるかのようになる。うわの空となり、この上なく力強い変わることはない〔愛の〕思いが示唆する動作ばかりを繰り返すこととなる。そして他人がどんなに驚いても蔑んでも、気にかけることもない。すべては忘れ去られ、ただその〔愛の〕思考とその〔愛する人の〕姿を見ること以外のすべては退屈なものとなる。わたしは、愛ほどに心を周囲のすべての事物か

ら力強く逸らすような思考を決して経験したことがない。今周囲のすべての事物から逸れると述べたが、それは愛の対象が眼前にはない場合の話である。愛の対象が眼前にあるなら、何が生じるか言うことはできまい。ただ、いくつかの場合には、おそらく大きな恐れがそれに擬えられるであろう。⁽²¹⁾

恋に取り憑かれた人の行為は常軌を逸するようになることが多々ある。これは誰でも知っていることである。われわれが恋愛を「病い」や「狂気」に喩えるのもそのためである。それでは、なぜ恋愛は「病い」や「狂気」に喩えられるのか。それは恋愛が、日常の俗事、つまり生活の必要や社会の義務といったものと根本的に相容れないような性格を持っているからである。レオパルディがここで語る「愛の思い」には、そのような暗黙の前提がある。「愛の思い」に取り憑かれた者には、日常の俗事がもはや目に入らなくなり、彼の心は非日常の世界へと「逸脱」する。つまり周囲の者たちから見れば、「心ここにあらず」といった体である。そのため彼らは彼を訝るのである。恋愛に取り憑かれた者の狂気じみた行為の例は、近代の文学作品を眺めてみても、突然恋に落ちた青年が揚々たる前途を棒に振って危険な行為に走る『マノン・レスコー』や『カルメン』、あるいは主人公が恋愛の苦悩の末に自死にまでおよぶ『ヴェルテル』や『オルティス』など、枚挙に遑がない。恋愛感情の特異な性格については、また、ロラン・バルトが『ヴェルテル』に言及しながら次のように書いている。

その朝、至急に「大切な」手紙を書く必要があった。なにか、計画の成否をかけた手紙だったのだ。ところがわたしは、そのかわりに恋文を書いている。それも、けっして投函することのない恋文を。世間に押しつけられた陰鬱な務めも、理性的なこまめさも、反射的な行動も、すべてを嬉々として放棄したわたしは、輝かしい「義務」に、愛の「義務」に課せられた無益な務めの方をとる。ひとしれず狂気の振る舞いに出る。おのが狂気の

ただひとりの証人となる。愛がわたしのうちに露呈せしめているのは、エネルギーなのだ。わたしのおこないはすべて意味がある（だからこそわたしは生きることができる、愚痴をこぼさず）。ただ、その意味というのが、捉えがたい目的性のことなのだ。²²⁾

バルトの語る恋に落ちた男は、自分の行為が世間的に見て「狂気の振る舞い」であることを十分に心得ている。しかるに、レオパルディの語る恋に落ちた人間は、そのような己の狂気を見つめるもうひとりの自分をほとんど見出せず、周囲の俗事を「すべて忘れる」ほどに、完全に「愛の思い」に支配されている。だが両者に共通して言えるのは、愛の思いには唯一無二の、ある特異な「エネルギー」が生じているということ、そしてそれが、ある「力」の感情と充実した「意味」に満たされているという確信である。先の『省察集』の引用に続く文章を見てみよう。

わたしは愛しているときほど生きていると感じたことはない。たとえ世界の残り全部がわたしにとって死んでいるも同然であったとしても。愛こそは生であり、生気を付与する自然の原理である。ちょうど憎しみが破壊と死の原理であるのと同様に。諸事物は互いに愛するようになっているのであって、生はこのことから生まれるのだ。²³⁾

この「力」の感情がどこからやって来たのか、またその意味が何であるのかを、「わたし」は具体的に言うことができない。「愛の思い」は“vago-indefinito”なものであり、「自然の原理」であり、バルトの言うように、その「目的性」は「捉えがたい」ものだからである。それにもかかわらず、まさしくこの感情、この確信によって、すなわち「愛」によって、「わたし」は、いまこそ最も深く、最も強く「生きることができる」、「生きている」ということを、はっきりと知っているのである。それこそが「自然の原理」であり、《科学者と哲学者の対話》

で「生きたものでなければならない」と語られていた「生」は、「愛」によって獲得されるのである。

レオパルディは、ポローニャで当地の貴婦人マルヴェッツィ (Teresa Carniani Malvezzi, 1785-1859) と親交を結び、彼女にたいする愛を胸に抱いたときの心境を弟カルロへの手紙 (1826年5月30日) に綴っている。

ぼくは、(フィレンツェの生まれで) ここ〔ポローニャ〕の名門貴族に嫁いだ婦人と親しくなりました。かの婦人との交際は、現在ぼくの人生の大部分をなしています。彼女は若くはありませんが、優雅で、(これまでそんなことは不可能だと信じていましたが) 若さ〔の欠如〕を補う知性 (エスプリ) の持ち主であって、驚くほどの幻想を〔ぼくのうちに〕つくり出します。彼女と出逢った最初の数日、ぼくは一種の狂乱状態 (激しい幻想) と熱狂のうちに過ごしました。(……) 彼女との邂逅は、ぼくの生涯に際立った一時期を今も画し、これからも画することになるでしょう。というのも、彼女はぼくを幻滅から救い出してくれたからです。彼女はぼくに、この世には喜びがあると確信させてくれました。以前ぼくはそのような喜びは不可能だと思っていたのです。彼女は、ぼくにはまだ潰えない幻想に浸ることができるかと確信させてくれました。非常に根強い〔ぼくが抱く〕反対の認識と習慣にもかかわらず。そして、長年にわたる眠りから、否むしろ完全なる死から、ぼくの心をふたたび目覚めさせてくれたからです。(……) ぼくの言うことを信じてください。ぼくが愛する力を回復するにつれて、同様に、ぼくがふたたび心に抱くにいたった激しい愛も、その力と感受性を日に日に強めてゆきます。激しい愛こそは、長い間、ぼくの魂の生命力の唯一の徴だったのでした。²⁴⁾

愛の幻想の齎す幸福感は、レオパルディに生き生きとした感受性を呼び覚まし、真に生きていることを感じられる「唯一の徴」となる。このポローニャの貴婦人への愛は、結局報われることがなかった。だが愛を心に抱くことによって、彼は自らの実存の意味を確認しているのである。

ふたたび詩に戻って考えてみよう。愛は《支配的思考》において、人間の甘美な「幻想 *errori, sogni*」のうちでも最高の幻想とされ、それゆえに想像上の観念的なものとして表現されている。しかしその両義的性格は、その幻想がきわめて現世的・身体的な「現実 *vero*」に取って代わる瞬間を許容する。愛の幻想は、幻想を打ち砕く苛酷な「現実にたいして強固に耐える」(v. 114) ことができるものであるというだけでなく、「しばしば現実と等しいものになる」(v. 115) ことができる。すなわち、「幻想」はここで「現実」と相互に置換可能となる。愛を心に抱くことによって、あたかも「幻想」と「現実」とが「反転」し、入れ代わるかのように。

レオパルディにとって「幻想」とはふつう、想像力による「擬似的な死」の状態に没入することであり、静的な性質のものである。しかるに、「現実」に取って代わることのできるほどに強力な「愛の幻想」は、非常に生命力に満ち、生き生きとした動的なものでもある (v. 113: «*sì viva e forte*»; v. 118: «*Vitale*»; v. 121: «*vivi segni*»)。そして「愛の思い」によってのみ、詩人は自分が「生きている」と感ずることができる (v. 127: «*teco ragionando io vivo*»; v. 129: «*ond'io respiro*»)。それどころか、「愛の思い」を抱く心によって、生は死より高貴なものに、つまり真に生きるに値するものとなるのである⁽²⁵⁾。

レオパルディにとって、生における愛の作用とは、ただひとつの石を磨き上げて宝石となし、残りのすべてをただの石ころに変えるような不思議な——スタンダール『恋愛論』の表現を借りるなら⁽²⁶⁾——「結晶作用」である。愛の思いを心に抱く前には、あらゆるものが「幻想 *illusioni*」であり、「偽り *errori*」、「まやかし *inganni*」にすぎず、「愛」さえもそのひとつにすぎない、とレオパルディは信じていた。それにもかかわらず、真の愛を心に抱くや、それが「ほんとう *vero*」となって、陰惨で不毛な生の暗闇を突然、煌々と照らし始めるのである。

4. 愛か死か

レオパルディは《愛と死》*Amore e Morte* (1832年?)で、「愛」と「死」を「生存 *essere*」における最も美しいふたつのものであるとした⁽²⁷⁾。

Fratelli, a un tempo stesso, Amore e Morte
 Ingenerò la sorte.
 Cose quaggiù sì belle
 Altre il mondo non ha, non han le stelle.
 Nasce dall'uno il bene,
 Nasce il piacer maggiore
 Che per lo mar dell'essere si trova;
 L'altra ogni gran dolore,
 Ogni gran male annulla. (vv. 1-9)

運命 [=自然の法] は、〈愛〉と〈死〉とを兄弟として、
 同時につくりだした。

この地上の世界も、そしてまた星々 [の世界] も、
 これほど美しいものをほかに持つてはいない。

一方 [=愛] から 善 [快樂・幸福] が、
 存在の海 [=世界・宇宙] で見出しうる
 最上の喜びが生まれる。

もう一方 [=死] は大きな悲しみを、
 あらゆる大きな悪 [苦痛・不幸] を無にする。

この詩と、同じく愛と死をテーマとした《コンサルヴォ》*Consalvo* (1832年?)においては、恍惚とするような愛の喜びと隣り合わせに、死への強い願望が表現される。

だが死の願望は、どちらの詩においても、愛の思いが決して報われることなく、激しい苦悩に苛まれる状態にあることを前提としている⁽²⁸⁾。《支配的思考》

で歌われたような愛の幻想が強固に持続するときには、死の願望は愛の幻想の強烈な光輝のもとでその影をひそめる。しかし愛が叶わず幻想がもはや持続しなくなったとき、死への峻烈な願望が詩人の心にふたたび浮上してくる。したがって、愛と死が詩人のなかで最高の善であり美となるのは、“真の生か、さもなくば死か”という実存のふたつの対蹠点としての、いわば究極の二者択一としての、激烈な意味を帯びてのことなのである。それはヴァーグナーや広くロマン主義において見られる愛と死の結びつきの甘美な幻想とは異なり、ましてヤバタイユのエロス論におけるような性愛と死の結びつきとは根本的に異なる。《コンサルヴォ》では愛と死が、一見ロマン主義的色合いの濃い劇的な調子で結びつけられているように見えるとはいえ、レオパルディにおいて「愛と死」は「愛と死の融和」などではなく、“愛か死か”という、どちらか一方の選択を劇的に迫るものなのである。

《コンサルヴォ》において、レオパルディ自身の似姿であるコンサルヴォは、死の床にあって、自分の心に秘めた思いをエルヴィーラに打ち明ける勇気を得、皮肉なことにまさに死の間際に、彼は愛を成就する。とはいえ、コンサルヴォが勝ちとったエルヴィーラの口づけは、愛ではなく、死にゆく者にたいする憐憫の情にすぎないだろう。だがこの一瞬の幸福によって、コンサルヴォのそれまでの激しい苦悩はあがなわれ、彼の生きてきた苛酷な生は、初めて意義あるものとなる。

[...] Ancora e sempre

Muto sarebbe l'infinito affetto

Che governa il cor mio, se non l'avesse

Fatto ardito il morir. Morrò contento

Del mio destino omai, né più mi dolgo

Ch'aprii le luci al dì. Non vissi indarno,

Poscia che quella bocca alla mia bocca

Premer fu dato. Anzi felice estimo
 La sorte mia. Due cose belle ha il mondo:
 Amore e morte. All'una il ciel mi guida
 In sul fior dell'età; nell'altro, assai
 Fortunato mi tengo. Ah, se una volta,
 Solo una volta il lungo amor quieto
 E pago avessi tu, fora la terra
 Fatta quindi per sempre un paradiso
 Ai cangiati occhi miei. Fin la vecchiezza,
 L'abborrita vecchiezza, avrei sofferto
 Con riposato cor: che a sostentarla
 Bastato sempre il rimembrar sarebbe
 d'un solo istante, e il dir: felice io fui
 Sovra tutti i felici. [...] (*Consalvo*, vv. 91-111)

(……) わたしの心を占める無限の愛情は、
 もし死が大胆さをあたえてくれなかったなら、
 いまでも、そして永久に、黙したままだろう。
 わたしはいま、自分の運命に満足して、死のう。
 この世に生まれて眼を開いた日のことをもう嘆いたりはしない。
 生を、わたしは空しく生きたのではない、
 その口にわたしの口を押しあてることが許されたのだから。
 それどころか、わたしは自分の運命を幸福だと見なす。
 この世界には〔ただ〕ふたつの美しきものがある。
 愛と死だ。一方〔=死〕には、天〔=運命〕が人生の花盛りにわたしを導き、
 もう一方〔=愛〕においては、わたしは自分が十分に幸運だった、と考える。
 ああ、もしも一度、たった一度でも、
 きみが〔わたしの〕長く続いた愛を静め報いてくれていたならば、
 その時から、わたしの変化した目に、
 世界は永久に天国と映ったことだろう。
 老いも、嫌悪される老いまでも、

わたしは安らかな気持ちで堪えたことだろう。
というのも、それに堪えつづけるためには、
いつもたったひとつの瞬間を思い出せば、
そして“わたしはすべての幸福な人たちにもまして幸福だった”
とすることで、事足りたであろうから。

たとえ一瞬のものにすぎなくとも、愛が成就したという記憶が、苛酷な生に耐える力を与えてくれる。レオパルディはこの《コンサルヴォ》と《愛と死》において、愛を死に結びつけた。後者では、愛の思いを抱く者にとっての、まさに二者択一の選択肢として⁽²⁹⁾。そして前者では、この世の最高のふたつの美が一方から他方へと直ちに移行することによって。つまり《コンサルヴォ》においては、生の最高の瞬間がおとずれるや否や、実存のもうひとつの圏域である死への「反転」が起るるのである。愛と死はここで瞬時のうちに連続するが、それは決して『トリスタンとイゾルデ』のような愛と死の融和ではない。

チェラジョーリは、これらの詩における愛と死の結びつきを次のように説明している。「レオパルディは、生を変貌させる愛という状態を、そして生をうばう死という状態をつくりあげる。(……)そして最高の善は、運命に支配される愛を欠いた生(そのような状況は[1832-33年頃の]《自分自身に》*A se stesso*で扱われている)に陥ることなく、愛の状態から死の状態へ即時的に移行することにある」⁽³⁰⁾。つまり、愛の幻想から覚める前に死ぬことこそが、レオパルディにとって最高の幸福である、というのである。チェラジョーリの言うことは尤もであるが、《コンサルヴォ》や《愛と死》で表現された死の願望が、愛の成就の不可能を前提としていることを忘れてはなるまい。このふたつの詩では、愛と死が兄弟として同列に並べられているが、レオパルディがほんとうに求めたのは、激烈で陰惨な嵐から避難するための港(死)ではなく、力強い太陽に照らされた航海(愛の幻想の持続する生)であっただろう。

実際にも《支配的思考》では、『カンティ』全体に通底する「追憶」⁽³¹⁾が鳴り

を潜め、ブラズッチの的を射た指摘の通り、動詞の現在形が多用される³²⁾。その意図するところは、追憶による美化作用を超越して、愛が今まさに「現前」し続けていることの明示である。間投詞の多用とも相俟って、「現前」する愛の積極的肯定・断定を鮮烈に印象付ける効果を生み出している。

結び

《支配的思考》で表現された、光輝に満ちた生の充足感は、レオパルディにとってのこの上ない存在の幸福可能性を指し示している。愛を生きることは彼にとって、「ほんとうの」生を意味するのである。それは不安や苦悩を伴いもするだろう。だが彼にとっての真の生は、不安や苦悩から解放された「擬似的な死」ではない。そうではなくて、レオパルディの望んだ「ほんとうの生」は、おそらく愛の「熱狂状態 delirio」のうちに生きることであろう。それは、愛によって引き起こされる快樂の極まった状態であり、また愛によって引き起こされる苦悶の極まった状態でもある。つまり、いかに天上的な喜びに浸る感覚と似たものであっても、同時に激しい痛みもまわりつく、地上にしっかりと足をつけた状態なのである。

しかしながら、「ほんとうの生」というロマン主義的な幻想が、現実世界で生き延びることもまた不可能であろう。愛には必然的に挫折と幻滅が伴うからである。《支配的思考》の後、《愛と死》、《コンサルヴォ》をへて《アスパジア》では確かに、愛の挫折と幻滅の色が濃くなり、《自分自身に》では「私がかつて永遠だと信じた、最後の幻想は消え去った」(v. 2-3: «Peri l'inganno estremo / Ch'eterno io mi credei»)として、ついに愛の幻想そのものが否定されるにいたる。「世界の虚無性」(v. 16: «l'infinita vanità del tutto»)を宣言する《自分自身に》における詩人の態度は、それまでの愛をめぐる諸詩で謳われた「愛の幸福」を完全に否定しているように見えるほどである。

愛の齎す高揚感と生の充溢がレオパルディによって真に生きられたものであ

ることに疑いはない。それはレオパルディの「世界の虚無性」の確信と「幸福の可能性」を希求する心情との間の揺れであろう。しかしながら、レオパルディは「愛」が幻想にすぎないことを十分に承知していたのである⁽³³⁾。

1819年のジョルダナーニへの手紙にはすでに、「万物の空しさ *vanità di tutte le cose*」⁽³⁴⁾、「事物の虚無性 *nullità delle cose*」⁽³⁵⁾という言葉が認められ、その世界の虚無性に茫然としつつも同時に冷静に受けとめる態度を示している。また、詩人が若き日に《初恋》で謳ったような愛の幻想についても、すでに1821年の《孤独な生》では、それが過ぎ去った青春時代の幻想にすぎず、追憶によって思い出すことでしか享受できないものであることを語っていた⁽³⁶⁾。1823年の《かの貴婦人に》では、ふたたび愛の美を至福の源泉として讃え、愛への頌歌として詩を結んではいるが、この詩には、愛は純粹に觀念上のものでありこの世界には存在しないという詩人の認識が、はっきりと読み取れる⁽³⁷⁾。詩人は、翌1824年の《人類の物語》でも、愛の幻想をつまらぬもののように語っていた⁽³⁸⁾。そして再度、愛の幻影にとらえられ、マルヴェッツィ夫人への愛を喜びにみちた手紙に綴りながらも（1826年）、その後結局は彼女への愛は挫折に終わり幻滅を味わうこととなった。さらにその後にも、ファンニへの新たな愛（1831年）から光輝に満ちあふれた詩《支配的思考》が生まれたが、自分の思いに答えてくれない彼女の態度に心を激しくかき乱され、うちひしがれた末に《自分自身に》や《アスパジア》のような幻滅を歌う詩をつくるにいたったのであった。

このようにレオパルディの人生は、愛の幻想の喜びと、挫折による幻滅の苦悩の繰り返しだったと言ってもよいだろう。詩人の歌う愛の回帰・反復はその意味で、実際に繰り返された経験を映し出している。そして結局のところ、愛はひとつとして叶えられることなく、幻想として終わった。これほどに愛の挫折と幻滅を繰り返したレオパルディであってみれば、愛が所詮幻想に過ぎないことは自明の理であったはずだろう。そして、《嵐の後の静けさ》（1829年）

の最終行に示したように⁽³⁹⁾、死だけが生の苦しみを癒してくれるものであることにも、疾うに気づいていた。あれほどに激しい愛の喜びを謳った《支配的思考》の中でも、「わたしが最初にこの生が何であるのかを経験によって理解したとき以来、死への恐れがわたしの胸を締めつけることはなかった」⁽⁴⁰⁾として、死への冷静かつ肯定的な態度を示している。

それにも拘らず、レオパルディがこの世における愛の幻想を求めたのはなぜか。それは感受性の鋭敏な彼にとって、愛の幻想の力があまりに大きすぎたためであろう。彼をとらえる幻想は過酷な「現実にとって代わる」、つまり愛の幻想が「ほんとう」であると錯覚させられるほどに強力だったからである。だからレオパルディは、愛を探し求めたというよりは、むしろふいに罠に捕らえられるかのように愛の幻想にとりつかれ、否応なしに身を委ねることになってしまったのではなからうか。そう考えれば、レオパルディの愛をめぐる態度の揺れと矛盾に説明がつかさう。

それゆえ「世界の絶対的虚無性」という、あまりにも絶望的に響く、しかし確信にみちた言葉と、その透徹した「幸福の希望」の否認は、快樂と幸福をつよく求めてやまない詩人の、悲痛な心の叫び声にはかならない。レオパルディは生の暗闇の中であって、愛の瞬間的で激烈な、眩いばかりの光輝を確かに享受しえた。《支配的思考》に謳われているような、その閃光こそが、たとえほんの束の間であれ、彼の「実存」を、すなわち「生の意義」を保証してくれるものとして、彼の目に映ったからである。最終的には死だけが慰めとなることを知りながらも。

註

本論におけるレオパルディの引用テキストは、次の版を底本としている。

Leopardi, Giacomo, *Tutte le opere*, con introduzione e a cura di W. Binni, con la collaborazione di E. Ghidetti, 2 voll., Firenze, Sansoni, 1969.

第1巻からの引用は作品名（および当該行数）を、『省察集』*Zibaldone di pensieri* にあてられた第2巻からの引用は、*Zibaldone* と略記した上で手稿の頁数（および年月日）を示す。

- (1) 拙論「レオパルディにおける死の瞑想」、早稲田大学イタリア研究所『研究紀要』第8号、2019年3月、83-110頁を参照。
- (2) «Lieta no, ma sicura» という詩句が《死者たちの合唱》*Coro di morti* (1824年)の5行目と30行目で繰り返される。
- (3) *Dialogo di un Fisico e di un Metafisico*: «la vita debb'esser viva, cioè vera vita; o la morte la supera incomparabilmente di pregio».
- (4) *Ibid.*: «[se la vita è] piena d'ozio e di tedio, che è quanto dire vacua, dà luogo a creder vera quella sentenza di Pirrone, che dalla vita alla morte non è divario.
「もし生が、空疎と言えるほどに無為と倦怠に満ちているならば、生と死には違いないという、あのピッローネ〔※古代ギリシアの懐疑論哲学者。前360-270年〕の格言が本当だと思える」。
- (5) *Coro di morti*, vv. 31-32.
- (6) 作詩の数日前にレオパルディは、自己の恋愛体験と心理分析の書『初恋の記』*Memorie del primo amore* (1817年)をものしており、研究者たちによってスタンダール『恋愛論』(1822年)との類似性が指摘されている。Cfr. Solmi, Sergio, *Studi leopardini*, a cura di G. Pacchiano, Milano, Adelphi, 1987, pp. 136-137; D'Intino, Franco, *Introduzione a Leopardi, Scritti e frammenti autobiografici*, Roma, Salerno, 1995, pp. XXII-XXIX.
- (7) 拙論「境界の消失——レオパルディの“無限”をめぐる」、東京大学南欧語南欧文学研究室『イタリア語イタリア文学』第3号、2006年7月、267-309頁を参照。
- (8) *Zibaldone*, 1017-1018 (6 Maggio 1821).
- (9) Cfr. vv. 30-31: «Mille nell'alma instabili, confusi / Pensieri si volgean!».
「幾多の定まらぬ、混乱した思考が、魂のなかをめぐる」。
- (10) *Zibaldone*, 3913-3914 (26 Novembre 1823).
- (11) 想像力の美化作用に関しては、拙論「追憶の詩学——レオパルディにおける記憶と

詩的創造について」、日伊協会『日伊文化研究』第46号、2008年3月、91-105頁を参照。

ティルゲルの指摘するように、彼方の世界に実在するはずのプラトンのアイデアと異なり、レオパルディにとっての「愛」は、人間の生み出した幻想にすぎない (Tilgher, Adriano, *La filosofia di Leopardi*, a cura di M. Boni, Bologna, Boni, 1985, p. 39)。

- (12) フビーニは、33-35年にナポリでつくられたと推定している (*Canti*, con introduzione e commento di M. Fubini, edizione rifatta con la collaborazione di E. Bigi, Torino, Loescher, 1964, p. 197n)。
- (13) アスパジアは、古代ギリシア、アテネ全盛期の指導者ペリクレス (前5世紀) の愛人 (内縁の妻) で、ルネサンスの高級娼婦 (cortigiana) にあたるような身分であったと考えられる。なお、諸注が提示しているように、レオパルディはファンニへの手紙の中で「アスパジアはあなたです」と言っている。
- (14) 最近ではこれらの詩を「フィレンツェでの恋愛を題材とした詩 *canti dell'amore fiorentino*」と呼ぶ研究者が多いが、それでもやはり的確な呼び名とは思われない。というのも、そのような呼び名では、これらの詩で歌われる愛を結局のところファンニにたいする愛として限定的に解釈することになりかねないからであり、研究者によっては全く別のコンテクストからの解釈を試みている。例えば、パスクイーニは《支配的思考》について、中世のカヴァルカンティーダンテの恋愛論との関連性を論じている (Pasquini, Emilio, *Il pensiero dominante*, in AA.VV., *Lectura leopardiana*, a cura di A. Maglione, Venezia, Marsilio, 2003, pp. 489-502)。
- (15) 同様の指摘をしている評者もいる。たとえばバンディーニの注釈では、「愛についてはこれまで繰り返し語られ書かれてきたけれども、そして人間に共通の経験であるけれども、各人がそれぞれの愛を二度と同じ経験ができないような仕方では生きている」とされている (Leopardi, *Canti*, a cura di F. Bandini, Milano, Garzanti, 1975, p. 229n)。
- しかし、フォスラーの言うように、詩人はその「新しい」経験を呼ぶための言葉を知らないと言いたいのだろう。「この詩には“愛”という言葉が一度もあらわれない。理由は明白である。その経験の新しさの前では、“愛”という言葉はいかにも使い古されたものに見えるからであり、過去に既に存在したものに事寄せればどうしても価値が減じるという印象を与えかねないからである。だから、“わたしはそれを名指す言葉を持ち合わせていない”ということなのである」 (Vossler, Karl, *Leopardi*, traduzione dal tedesco di T. Gnoli, Napoli, Ricciardi, 1925, p. 269)。
- (16) レオパルディ研究史においてきわめて重要なブラズッチの論考 (Blasucci, Luigi,

- Leopardi e i segnali dell'infinito*, Bologna, Il Mulino, 1985) の中で提案された、「無限」への志向をあらわす（主として文体上の）^{しるし}標のこと。
- (17) Girardi, Antonio, *Lingua e pensiero nei Canti di Leopardi*, Venezia, Marsilio, 2000, pp. 71-88. 語彙・文体分析はナターレも行なっているが、彼はそれを偽ロンギノス『崇高論』および旧約聖書の詩篇と結びつけており示唆に富む（Natale, Massimo, *Il canto delle idee*, Venezia, Marsilio, 2009, pp. 58-86）。
- (18) Nencioni, Giovanni, *La lingua del Leopardi lirico*, in Id. *La lingua dei «Malavoglia» e altri scritti di prosa, poesia e memoria*, Napoli, Morano, 1988, pp. 369-398.)
- (19) この「相貌 aspetto」の解釈は研究者の間で割れている。ジュゼッペ・デ・ロベルティスやガッロ／ガルボリは、愛する女性の相貌を指すとする解釈するが、フビーニ／ピージやギデッティ、ドッティらは、愛する女性以外の女性たちの相貌であると解釈する。それらに対してリゴーニは、ストラッカーリの解釈を支持して、「事物（全般）の現実 la realtà delle cose」であるとしている（Leopardi, *Poesie e prose*, vol. 1, a cura di M. A. Rigoni, Milani, Mondadori, 1987, p. 975）。
- (20) 愛の両義的性格は詩のテーマとして文学史上新しいものではないが、レオパルディにとっての愛の両義的性格を最もよくあらわしている語「delirio」に注目したい。《支配的思考》の129行目にあらわれる「delirio」について、注釈者たちは見過ごしているか、若しくはデ・ロベルティスのように、前行の「diletto」と同義に解釈している（Leopardi, *Canti*, con l'interpretazione di G. De Robertis, nuova ristampa, Firenze, Le Monnier, 1998, p. 261n）。
- しかし、ここでは文字通り「熱狂状態」（それは激しい幻影を伴うだろう）、または医学的な意味で「譫妄状態」と解釈する方が適当であろう。それは懊悩によって引き起こされる場合もあるだろうし、歓喜のきわまった状態の場合もあるだろう。後者の場合には、きわまって陶然となり外界にたいする感覚が失われれば、エクスタシスにも近い状態となろう。この詩にあらわれる「delirio」に関しては、諸注釈者の解釈するように同義の語を同じフレーズを使って繰り返すと見なすよりも、同じ言い回しのフレーズを使い反意語に置き換えることによって愛の思いの両義的性質を強調していると考えられないだろうか。レオパルディによれば、すべての「熱狂状態 entusiasmo」(=「倦怠 noia」とは正反対の状態)は生きている実感を与えるものであるから、そう解釈しても全く矛盾はない。“entusiasmo”との関連で《支配的思考》を論じているのは、おそらくピエラッチの論考だけである（Pieracci Harwell, Margherita, *I due poli del mondo leopardiano*, Firenze, Franco Cesati, pp. 71-103）。
- ただ、諸注釈者の説明にあるように“diletto”の同義語と解釈できる可能性も否定

しきれない。その場合には漸増法的に“diletto”をさらに上回る歓喜、すなわち天上的な悦楽状態を“delirio”は意味しているとも受け取れるであろう。

この疑問を解くためには、レオパルディの別のテキストとの比較検討をせねばなるまい。“delirio”という語は『カンティ』の中では他に、複数形«deliri»が《アスパジア》の65行目で一度、形容詞«deliro»としては《初恋》の24行目で一度あらわれるのみである。《初恋》の方では、報われぬ不幸な愛の齎す懊悩、それによって睡眠を妨げられるような熱病的状態を指して使われている（『初恋の記』にも同様の記述を見出す。Cfr. *Memorie del primo amore*: «Ieri, avendo passato la seconda notte con sonno interrotto e delirante [...]» 「昨日、眠りは遮られ錯乱して二度目の夜を過ごした(…)」)。《アスパジア》においては、愛によって引き起こされる「激しい感情・幻影にとらわれた状態」の意で使われており、それは「苦悩・煩悶」ともとれるし、「歓喜・悦楽」とも解せる。それゆえ、レオパルディは『カンティ』の中でこの語をもっぱら愛によって引き起こされる懊悩・煩悶もしくは歓喜のきわまった熱狂状態を両義的に表現するために用いたと考えることができる。

『オペレッテ・モラーリ』の中では、“delirio”は3回あらわれ、それぞれ、読書の快楽によって引き起こされる甘美な「自己消失・エクスタシスの状態」（《パリーニあるいは栄誉について》）、文字通りの（否定的な意味での）「狂乱・譫妄状態」（《オットニエーリ語録》）、“vaneggiamento”と並列され「狂気・精神錯乱」（《鳥への賛辞》*Elogio degli uccelli*）の意で使われている（ちなみに《アスパジア》105行目で、«vaneggiar»という名詞化した動詞もあらわれるが、これは愛の負の側面を表現する語であり、『カンティ』においてhapaxである）。つまり、《パリーニあるいは栄誉について》でのみ、“dolcissimo”という形容詞を伴い快楽の意で使われているが、いずれにせよ、どれも詩で表現される愛の歓喜／懊悩とは表面上関係のない文脈で用いられているため、『カンティ』の中にあらわれる愛の“delirio”の意を決定するための比較検討の材料としては残念ながら不十分であるが、少なくとも諸作品中での“delirio”は、むしろその負の性格を帯びて使用される傾きがつよいように思われる。しかしながら、後で引く弟カルロへの手紙においては、愛の「歓喜・悦楽」の意味を帯びて用いられており、やはり片方の意味に決定することはできない。

ただ確かなのは、“delirio”が正常・平静な状態からの「逸脱」——それは激しい幻影を伴い、レオパルディにおいてはもっぱら愛によって引き起こされる——を意味するということである。

(21) Zibaldone, 59.

(22) ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』、三好郁朗訳、みすず書房、1980年、

38 頁を参照。

(23) *Zibaldone*, 59.

(24) Lettera a Carlo Leopardi (Bologna, 30 Maggio 1826), in *Tutte le opere*, p. 1254.

(25) 《アーリマンに》*Ad Arimane* においても、次のような一節を見出す。

«Non ti chiedo nessuno di quelli che il mondo chiama beni: ti chiedo quello che è creduto il massimo de' mali, la morte. (non ti chiedo ricchezze ec. non amore, sola causa degna di vivere ec.» (in *Tutte le opere*, p. 350).

「わたしはおまえに、世界で善と呼ばれているものを何ひとつ請い求めはしない。ただ悪のうちで最大と信じられているものを請い求める。それは死だ。(富をくれとも頼まないし、生の唯一の立派な理由である愛をくれとも頼みはしない)」。

(26) リゴーニも、《支配的思考》第 12 節や《アスパジア》第 2 節に、スタンダールの的な「結晶作用」を看取している (Rigoni, Mario Andrea, *Il materialismo romantico di Leopardi*, Napoli, La scuola di Pitagora, 2013, pp. 87-91)。

(27) 《コンサルヴォ》においても同様の言説が見られる (*Consalvo*, vv. 99-100: «Due cose belle ha il mondo: / Amore e morte»)。

(28) Cfr. *Amore e Morte*, vv. 27-44: «Quando novellamente / Nasce nel cor profondo / Un amoroso affetto, / Languido e stanco insiem con esso in petto / Un desiderio di morir si sente: / Come, non so: ma tale / D'amor vero e possente è il primo effetto / Forse gli occhi spaura / Allor questo deserto: a sé la terra / Forse il mortale inabitabil fatta / Vede omai senza quella / Nova, sola, infinita / Felicità che il suo pensier figura: / Ma per cagion di lei grave procella / Presentendo in suo cor, brama quiete, / Brama raccorsi in porto / Dinanzi al fier disio, / Che già, ruggiando, intorno intorno oscura»。

「心の奥深くに、ひとつの愛情が新たに生まれるやいなや、それと一緒に憔悴し衰弱した胸のうちでは、死の願望が感じられる。なぜか、わからない。だが、真の力づよい愛の第一の効果は、そのようなものだ。たぶんそのときには [=愛が生まれるときには]、この荒野 [=愛のない生] が、[愛情を抱く者の] 目を怖れさせるのだ。たぶん死すべき者 [=人間] は、この世界には自分の思考がつくり出す、あのかつて感じたことのない (並外れた)、唯一の、無限の幸福が欠けており、そのような世界が自分にとって、住むことのできない土地になってしまうのを見るのだ。だがそのために [=まさしく幸福を求めるがゆえに]、荒々しい [苦悩の] 嵐を心のなかで予感して、すでに、轟きながら、あたり一面を闇に包みこむ激しい熱望 [の嵐] を前にして、風ぎを切望し、港に身を寄せることを切望するのだ」。

ここでは、詩人は《支配的思考》のような強力な幻想からすでに覚め、愛の幻想を

冷静な目で観察している。

- (29) Cfr. *Amore e Morte*, vv. 88-90: «Ai fervidi, ai felici, / Agli animosi ingegni / L'uno e l'altro di voi conceda il fato».

「[愛の感情に] 燃えたつ者たちに、幸福なる者たちに、勇敢な天分（性質）を持つ者たちに、運命がおまえたち [=愛と死] の両方をともにあたえてくれますように」。

- (30) Cfr. Ceragioli, Fiorenza, *Lingua e stile nei Canti fiorentini e in Asapasia*, in AA. VV., *Lingua e stile di Giacomo Leopardi*, Firenze, Olschki, 1994, pp. 239-240.

- (31) 前掲拙論「追憶の詩学——レオバルディにおける記憶と詩的想像について」を参照。

- (32) Blasucci, Luigi, *Lo stormire del vento tra le piante. Testi e percorsi leopardiani*, Venezia, Marsilio, 2003, p. 173.

- (33) たとえば《アンジェロ・マイに》*Ad Angelo Mai* (1820年)の129行目に、愛は「われわれの生の究極の幻想 ultimo inganno della nostra vita」という表現が見出され、レオバルディが愛を他の諸々の幻想と同様に「欺瞞 inganno」であると認識していたことが窺われる。しかし、それは詩人にとって、過酷な生と不毛な現実に対する「最後の ultimo」砦としての意味を持っていたらう。

- (34) Lettera a Pietro Giordani (Recanati, 19 Novembre 1819), in *Tutte le opere*, p. 1089-1090.

- (35) Lettera a Pietro Giordani (Recanati, 17 Dicembre 1819), in *Tutte le opere*, p. 1090.

- (36) Cfr. *La vita solitaria*, vv. 39-48: «Amore, amore, assai lungi volasti / Dal petto mio, che fu sì caldo un giorno, / Anzi rovente. Con sua fredda mano / Lo strinse la sciaura, e in ghiaccio è volto / Nel fior degli anni. Mi sovvien del tempo / Che mi scendesti in seno. Era quel dolce / E irrevocabil tempo, allor che s'apre / Al guardo giovanil questa infelice / Scena del mondo, e gli sorride in vista / Di paradiso».

「愛よ、愛よ、かつてあれほどに熱かった——否むしろ燃えたぎっていた——わたしの心から、おまえはずっと遠くへ飛び去った。不運がその冷たい手で、わたしの心を締めつけ、[わたしの心は] 人生の花盛り [=青春] に、氷に変えられた（凍りついた）。おまえ [=愛] が、わたしの心のなかに降りてきた（深くに入りこんだ）、甘美な取り戻しようもないあの時のことを想い出す。その時、若者の目には、世界のこの不幸な舞台が幕を開け、天国のような様子で微笑んだものだった」。

- (37) Cfr. *Annuncio delle dieci canzoni*, in *Tutte le opere*, p. 57: «Alla sua donna [...] cioè l'innamorata, dell'autore, è una di quelle immagini, uno di quei fantasmi di bellezza e virtù celeste e ineffabile [...]. In fine è la donna che non si trova»

「著者が愛を傾ける女性は、あの想像のひとつであり、あの天上的なえも言われぬ

美と徳の幻のひとつであり（……）。要するに、どこにも見出されない女性である」。

- (38) Cfr. *Storia del genere umano*: «Avranno tuttavia qualche mediocre conforto da quel fantasma che essi chiamano Amore».

「それでも〔ジュピターの与える酷い運命もかわらず、人間たちは〕、彼らが〈愛〉と呼ぶ幻から、いくらかの月並みな慰めを得ることだろう」。

- (39) Cfr. *La quiete dopo la tempesta*, vv. 53-54: «beata / Se te [=unama prole] d'ogni dolor morte risana»

「あらゆる苦痛を死が癒やしてくれるなら、おまえ〔人間〕は幸福だ」。

- (40) *Il pensiero dominante*, vv. 44-46: «Giammai d'allor che in pria / Questa vita che sia per prova intesi, / Timor di morte non mi strinse il petto».